

イリスとセルキー。

— 友情のアイスエッジ —



妖魔・木海月



## 雪原にて

---

そこにははるか昔に迷宮に封印された『冬の魔王』と呼ばれる存在と、迷宮を封印する『氷雪の民』と呼ばれる存在が居る――。

ハヌイ老人からその話を聞いた少女イリスは一人、エリアスの北東部に位置する雪原へとたどり着いた。

「うわぁ、これが雪かぁー...白くて、冷たくて何だかわくわくしちゃう！」

長い銀髪をなびかせながら、イリスは初めての銀世界に心を躍らせる。

雪玉を作り、柔らかな雪の中に飛び込み、最初は子供のように無邪気に遊んでいたイリスだったが.....この数分後に、彼女は雪原の冷酷な洗礼を受ける事になるうとは思ってもいなかった。

「うう〜っ、寒い！寒いよお...」

突如として巻き起こった吹雪に、イリスは体を震わせながら雪原を歩いていた。不意に、彼女のお腹からぐう〜っ！と腹の虫が啼いて、空腹を訴える。

「お腹空いたなあ...それに寒い...こ、こんなことなら来る前に沢山ご飯食べてくるんだった...あうう、もう駄目っ」

ひとしきり大きな腹の虫を啼かせると、イリスは雪原にバタリと倒れ、雪に体を埋めていった.....。

(こ、こんな所で倒れるわけにはいかないのに...私にはお婆ちゃんの仇討ちがまだ.....)

「きゅう、きゅう」

不意に、彼女の耳元に謎の音が聞こえる。その音に気がついて、イリスはうっすらを目を開けた。すると.....。

「きゅう？」

イリスの目の前に、ピンク色の綿あめの様な生き物がいつの間にか現れ、不思議そうに見つめていた。最初は訝しげに眺めていたイリスだったが、徐々に意識が覚醒する。

(変な綿あめ...変な声で鳴いてるし、動いてる...あれ？それってつまり...)

食料を見つけたことで一気にイリスの意識が覚醒する。イリスはスッと起き上がるとその生き物

を見つめじゅるりと涎を垂らしていた。  
彼女の変貌ぶりに、生き物はビクッと体を震わせた。

「飯...ごはん...いただきますっ！」

イリスは弓を取り出し、生き物に狙いを定める。生き物はふるふると身体を震わせて涙を流した。

「きゅっ？きゅうきゅうっ！」

「ふふふ、大丈夫だよおご飯ちゃん...ちゃあんと残さず食べてあげるからね！」

「きゅ、きゅきゅ〜！！」

イリスが矢を放とうとした、その瞬間だった。

「ごるうあああああっ！ヒトン家の家畜に何してやがんだ手前はああああああ！」

「！？」

どこからともなく聞こえてきた少女の叫び声に、イリスは気を取られ狙いを外してしまった。難を逃れたあの生物は少女の声が聞こえたほうへと逃げて行った。

「えっ、誰！？どこ...？」

暫く周りをきょろきょろと見渡すイリスの目の前に、崖の上から声の主と思われる一人の少女が現れた。

声の主は、頭に青いアザラシの様な毛皮を被り、水着の様な服をまとい、飾りのない簡素な槍を持った金髪の少女だった。良く見ればその手には黒くて鋭い爪が生え、びっしりと白い毛で覆われていた。足も同様に白い毛で覆われ、鋭い爪が3本生え揃っていた。

明らかに人間ではないその姿をまじまじと見つめていたイリスに、少女はムスっとした表情で先ほどの生き物を小脇に抱えたまま、槍を構えてイリスを威嚇する。

「あ、あなたは...？」

「お前、見たことない奴だな。どうせバカな奴に雇われて、家畜を狙ってるアホな冒険者だな！  
？」

アタシ達はちゃんとエリアスの法律に則って商売しているってのに.....どこまでも自分勝手な奴らめ！」

「えっ？それじゃあなた...もしかして『氷雪の民』の人？」

「.....そうだよ。なんか文句でもあんのか？」

「うわーっ！本物だあ！」

「...へ？」

少女の啖呵には目もくれず、イリスは目をきらきらと輝かせて、興味津々と言った感じだ。対して、突然奇声を発したイリスに少女は驚いて間の抜けた声しか出なかったが、すぐにキッと鋭い目でイリスを睨んだ。

「あ、びっくりしちゃった？ごめんなさい。でも私ね、お婆ちゃんやハヌイおじいさんに氷雪の民のお話をしてもらって、会ってお友達になりたいなーってずっと思ってたの！！」

「...へえ、友達に...ねえ」

うきうきと少女に話しかけるイリスに対し、少女は侮蔑するように笑みを浮かべていた。

「アタシ達をつい最近まで『バケモノ』って罵ってたエリアスの連中にも、おめでたい奴が居たもんだな」

「え？私生まれも育ちもベロスよ？」

「どっちだって構いやしないさ。それよりも、お友達になりたいんなら、アタシ達の飼ってるケモノプリリンを狩らないで欲しいな」

「えっ！？あの綿あめみたいなのもプリリンなの？」

ケモノプリリンの事も知らないとは...少女は呆れた様に頭をかきながら話を続ける。

「まったく、本っ当に田舎者だなお前。こいつらの毛皮や瞳はいい値段で取引されるんだ。アタシ達にとっちゃあ重要な収入源だよ。

なのに、お前達人間はさも自分たちの物の様に勝手に狩りやがって...こっちはいい迷惑なんだよ！」

少女が声を張り上げてそう叫ぶと、急にイリスの瞳から涙がつうーっと一筋流れた。それをみて少女は動揺する。

「えっ...なっ、何泣いてんだよ！？」

「...ごめんなさい。そうよね、大事に大事に育てた家畜を勝手に殺しちゃうのは酷い事よね。本当にごめんなさい」

突然、イリスはしゅんとしてしまい、力なく少女に謝った。少女は、イリスの落胆振りになぜか心がズキッと痛んだ。

そして、今にも泣きそうなイリスを見るや否や、さっきまでの敵意は何処へやら、慌てふためきながらイリスを慰めていた。

「だ、だからなんでお前が泣くんだよ。私も言いすぎたよ、悪かった！だから、泣くなよ...な？」

「ご、ごめんなさい...私、急に.....あなたって良いヒトね」

「へ？えっ？ばっ...バカな事言うんじゃないよ！アタシはお前を脅したんだぞ？わ、悪い奴なんだぞ？」

「ううん、いいの。そもそも私が勝手にその子を狩ろうとしたのが悪いんだし.....」

「あ、そういえば...どうしてこいつを狩ろうとしたんだよ？」

「...そ、それはその.....」

思い出したかのように、イリスの腹の虫が催促する。突然の事でイリスは赤面し、少女は納得したように頷いた。

「ああ.....そう言う事。仕方ないな、エリアスまで送って...」

イリスをエリアスに送ろうとする少女の背後から、突然巨大な氷の腕が現れ少女を掴んだ！

「え？ぐわあっ！」

「ひゃっ！な、何なの！？」

少女を掴んだ腕はそのまま少女をぎりぎりと締めあげる。たまらず少女は悲鳴を上げた。

「うあああああっ！」

「このままじゃあの子が...！こうなったら」

少女を助けるためイリスは弓を取り出し、腕に狙いを定めた。矢の先端から神秘的な光があふれ、一際大きく輝いたのを見計らってイリスは矢を放つ。

「いっけええええ！」

『ヌゥァァァ！？』

矢を打ち込まれた氷の腕は激しい悲鳴を上げて少女を手放すと、そのまま砕けて消えてしまった。

敵の気配が消えたのを察して、イリスは弓を納めて少女へ駆け寄り手を差し出す。

「ケホッ.....今のは一体...？」

「.....もう大丈夫。この周辺にはもういないわ、けがはない？」

「お、おう。えっと...」

イリスの差し出した手を前にして、急にもじもじし始めた少女。その事を不思議に思いイリスが首を傾げると、恥ずかしそうに少女が尋ねる。

「お前の名前...なんだよ」

「え？」

「お、お前の名前が分からないと、お礼が言えないだろ！」

顔を赤らめながらそう叫んだ少女の言葉を聞いて、イリスは思い出したように声をあげていた。

「あっ、そういえば自己紹介がまだだったわ！私はイリス。イリス・イヴィエール。よろしくねえっと...」

「あ、アタシはセルキー。ありがとうな、イリス...」

「セルキー.....良い名前だねっ♪」

——こうして。イリスと氷雪の民の少女、セルキー.....二人の少女の出会いと別れの物語は始まった。

## 祖母の悪友

---

「ほら、着いたぞ。ここがアタシ達の集落だ」

「うわぁ、すごーい！」

イリスに助けられたセルキーは、お礼も兼ねてイリスを自分達の集落へと案内していた。

いくつもの岩陰や洞窟を進んで、へとへとだったイリスだったが、セルキーの集落の美しさに目を奪われ、今までの疲れが嘘の様に吹き飛んでいた。

「どうよ？ここは夕暮れが一番綺麗なんだ！」

「うわぁ、男の人皆イケメンだぁ！女の子も皆綺麗！」

「って、そっちかい！」

思わず突っ込みを繰り返すセルキーを無視して、イリスはセルキーに質問する。

「そういえば、さっき話してた妹ってどこにいるの？早く会いたいなぁ」

不意に、イリスとセルキーの傍にある雪ダルマの後ろから物音が聞こえた。不思議に思って二人が振り返ると、そこには白いアザラシの毛皮と、白いワンピースを着たセルキーに似た少女が少し怯えながら顔を覗かせていた。

「なんだ、そこにいたのかチョーキー」

「.....」

「うわぁ、可愛い～！チョーキーちゃんって言うの？私イリス。よろしくね！」

イリスが自己紹介しながら手を差し出すが、チョーキーはセルキーの後ろへと逃げだし、彼女の背後からじっとイリスを見つめていた。

「.....」

「あ、あれ？」

「悪いなイリス。こいつちょっと人見知りだよ...」

「ううん、大丈夫よ」

セルキーと親しげに話すイリスを見て、チョーキーはセルキーの毛皮をギュッと引っ張る。

「痛っ、ちょ、チョーキー何するんだよ！」

「...お姉ちゃん、どうして人間がここに居るの？」

「...え？」

チョーキーの言葉から、イリスに対する恐怖と戸惑いが滲み出ていた。その言葉を聞いて、セルキーは困った様に微笑む。

「……ほら、お前の大事なプリちゃん」

セルキーは右腕に抱えていたケモノプリリンを差し出す。すると、チョーキーは驚きと喜びの表情を浮かべてケモノプリリンを受け取った。

「プリちゃん！えへへ、無事でよかった～」

「きゅう～」

「あのなチョーキー、イリスはな、アタシとそのプリちゃんの命の恩人なんだ。だからさ、そんなに怖がらなくいでくれよ」

「そうだったんだ……イリスお姉ちゃん、お姉ちゃんとプリちゃん助けてくれてありがとう」

先ほどどうって変わり、愛らしくお辞儀をするチョーキー。それに笑顔で答えるイリスだったが、周囲が騒がしいことに気付いた。

周りを見渡せば、遠巻きに数人の若者が、イリスを見てはヒソヒソと声を掛け合う。その様子を見て、イリスは顔をうつむく。

「……どうやら私は歓迎されてないみたいね」

「……ていっ！」

「お姉ちゃん！？」

セルキーは何を思ったのか、不意にイリスにデコピンを喰らわした。

「ひゃっ！？セルキー？」

「いちいち気にすんな。誰が何と言おうと、イリスはアタシの命の恩人だよ…」

「セルキー……」

「お姉ちゃん。早く帰ろうよ」

「分かってるよ。さ、行こうぜ」

セルキーが歩き出すと、その傍らに張り付くようにチョーキーも歩いて行く。彼女たちの後でイリスは少しうつむいていたが、首を横に振ると笑顔を作って彼女たちの後を歩いて行った。

「うわあ、おっきい……！」

集落でひととき大きななかまくら。ここがセルキーとチョーキーの家だった。その大きさにイリスが思わず驚嘆する。

「へへっ、これでも一応集落の長の孫娘だからな」

「そう言えばおじいさんが居るって言ったけど...その、私が居ても大丈夫なの？」

「構いやしないよ。むしろ祖父ちゃんも喜ぶぜ、なんせ久々の人間だからよ」

「そ、そう？ならいいんだけど」

「お姉ちゃん。早く入ろうよ」

「そうだな。んじゃあ改めて歓迎するぜイリス！」

ドアを開けて中に入ると、外とは打って変わって驚くほど暖かく快適な空間が広がり、その奥に彼女らを出迎えるように、初老の男性が椅子に腰かけていた。

「ただいまあ〜」

「ただいまあ〜祖父ちゃん帰ったぞ」

「おお、戻ったかお前達。ん？その娘は...？」

「ああ、こいつはイリス。アタシの命の恩人だよ」

「初めまして、イリス・イヴィエールです」

自己紹介をしてお辞儀をするイリス。一方、その名を聞いてセルキーの祖父は驚きを隠せないと言ったような顔つきでイリスをまじまじと見ていた。

「イ、イヴィエール...！？」

「？どしたよ祖父ちゃん」

「イヴィエール、その銀の髪...もしやおぬし『デル族』だな？」

「デ、デル族う！？」

デル族という言葉にセルキーは驚き、イリスは長い銀髪をくるくると指で巻きながら少し恥ずかしそうに答えた。

「え、ええ...そう、ですけど」

「つまりおぬしはマリヌの孫娘か...昔のあ奴そっくりじゃわい。まさか、こんな日が来るとは思ってみなかったのお...うっ、うっ」

「おい祖父ちゃん。何泣いてんだよ」

「おじいちゃんどうして泣いてるの？悲しいの？」

「違うんじゃよチョーキー。嬉しいんじゃ、まるであ奴がここに来てくれたようでのお.....」

「マリヌ？おじいさん、ひょっとして私の祖母の事を知っているのですか？」

「ああ勿論だとも。昔ワシはマリヌと各地を旅していた仲間だからのお」

「「え、ええ〜っ!？」」

驚愕の事実を知り、イリスとセルキーが同時に驚く。そしてセルキーは問い詰めるように祖父の肩に手を伸ばす。

「どう言う事だよ祖父ちゃん！昔ヤンチャして回ってた仲間の孫がこのイリスって事!？」

「く、詳しく教えてくださいませんか!？」

「ああ〜、積もる話は飯を食べながらにしよう。セルキー、晩飯頼んだぞ」

「分かってるって。今日は腕によりをかけてとびきり上等なの食わせてやるから覚悟しとけよ!」

セルキーの作った豪華な料理を食べながら、セルキーの祖父はマリヌとの出会いや冒険の日々、アガシュラとの戦い、氷雪の民の歴史、冬の魔王の伝説を3人に語り始める。その内容に、3人は心躍らせ、涙を流し、時にはあまりのおかしさに笑い声をあげた。

そして、祖父はイリスにマリヌの事を訪ねたが、イリスは顔をうつむき、マリヌがアガシュラに殺された事、自分の目的がその復讐である事を告白した。

イリスの旅の目的を知って、セルキーはイリスと共に旅に出る事を決意した。それを聞いてチャーキーは少し泣きそうになったが、見送る事を決意した。

そしてその夜、イリス達はまるで姉妹の様に同じ布団で眠りに着いたのだった。

——翌朝

「.....ふわあ、よく寝たあ〜〜」

大きな伸びをしながら、イリスが目を覚ました。ふと、辺りを見渡せばセルキーの姿が見当たらない。

きょろきょろと見渡していると、チャーキーがイリスに声をかける。

「イリスお姉ちゃん、おはよう。どうかしたの？」

「あ、チャーキーおはよう。あの、おじいさん。セルキーが見当たらないんですけど、どこか心当たりありますか？」

「ああ、あの子なら今朝早く『厳冬のラビリンス』に向かって行ったよ。ここを離れる前に最後に両親に報告するとな」

「.....両親？そういえば昨日もみませんでしたけど一体.....」

イリスが言いかけたのを手で制して、老人は静かに首を振った。

「...ちょうど1年前じゃよ、ラビリンスの封印を確かめるために出かけたっきり帰ってこない

のじゃ」

「……それって!？」

「あの子ももう分かってる……これがあの子なりのけじめのつけ方じゃよ」

「私、セルキーを迎えに行ってきます!」

「うんむ。気をつけてな」

## 冬の魔王、ビントー

---

——厳冬のラビリンス 入口

小さな白い花を入口に捧げ、決意を表すセルキー。

「父さん……母さん。私ね、人間の友達ができたよ。しかもその子は、昔祖父ちゃんが旅していたころの仲間の孫娘だったんだ。

不思議だよね……それでね、私、その子と一緒に色んな場所へ旅しようと思うの。もっともってこの世界の事を知りたいんだ。

だから今日で父さん達を待つのは……終わりにしようと思う。でも心配しないで、帰ってきたらきつと……」

セルキーが言葉を続けようとしたその時、迷宮の中から謎の声が聞こえてきた。

『そいつぁ無理ってもんだ！』

「！？」

迷宮の中からセルキーに向かって、昨日と同じ氷の腕が襲いかかる！その一撃をかわしたセルキーは驚愕しながら槍を構える。

「なっ、これは昨日の……お前は一体誰だ！？」

『又ウァハハハ！こりゃ失敬、自己紹介がまだだったなあ』

迷宮の中から、無数の魔物を従えた氷山の様な魔物が姿を現す。その圧倒的な威圧感に、セルキーは思わずすくんでしまう。

「なっ、あ……」

『俺っちはビントー！又の名を冬の魔王たぁ俺っちの事よ！』

「ビントー……？馬鹿なっ！お前はアタシ達と雪女の魔力で封印されてるはずだ！出られるわけが……」

『又ウァッフフ…それもこれもトクちゃんが1年前から頑張ってくれたおかげよお。冰雪の民2匹にい、雪女を全滅させてくれるたぁ、最近のアガシュラはやるねえ本当』

「2匹……だと？まさか…」

『そうそう、そのまさか！』

ビントーの口からボロボロになったアザラシの皮が2つ吐きだされる。それが何を意味するか理解したセルキーは涙を浮かべて毛皮を拾う。

「父さん……母さん……っ！」

『1年前にこいつらが居なくなってから毎日毎日、迷宮の外から思い出話をする健気なお前が気に入っちゃってよお、集落を襲う前にこうしてお前を待ってたってわ・け・よ。お前は特別に氷漬けにして俺っちのコレクションにしてやるぜえ』

セルキーを掴み、締め上げるビントー。セルキーは涙を浮かべながらもビントーを睨む。

『又ウァハハハ！そそる表情だ、さぞ綺麗なコレクションになるだろうよ』

「ぐあっ……あぁっ……！」

ビントーがセルキーにとどめを刺そうとした瞬間、光を纏った矢がビントーの腕を砕き、セルキーを解放した。

『又ウァアアア！？こいつぁ昨日の……俺っちの腕を砕いた奴だな？出て来おい！』

腕を砕かれ怒り狂ったビントーの前に、怒りの表情を浮かべたイリスが姿を現し、セルキーに駆け寄る。

「イ…リス…？」

「大丈夫セルキー？ほら、これを食べて……」

イリスはセルキーにチェリークッキーを差し出す。セルキーはクッキーを食べて少し元気が戻ったのか、ふらつきながらも立ち上がった。

「うっ…くう……た、助かったよイリス」

「気にしないで。それより、これが昨日おじいさんの言ってたビントーなの？どうして外に……」

「……雪女達と、アタシの両親をトクって奴が殺して封印を解いたんだ……」

「っ！？封印を解くためになんて事を……許せない！」

怒りを露わにしたイリスが弓を取り出す姿を見て、ビントーは腕を復活させながら思い出したように声を出す。

『銀髪の弓使いい……お前がトクちゃんの言ってたデル族の末裔かぁ。まだ封印が解けてない俺っちには分が悪すぎるなぁ……』

状況を不利と見たビントーは吹雪に姿を変え、イリスたちの周囲に雪ダルマの魔物スノーマンを

召喚する。

『雪ちゃん達い、足止めは任せたあ。あ、冰雪の民は俺っちの大事なコレクションだあ。くれぐれも傷つけるなよ』

「待ちなさい！どこへ行くつもり！？」

『ぬあぁに……ちよっくら集落潰して封印を弱めるだけよ。もう少し封印がとけりゃあお前なんざ敵じゃないねえ』

「なっ！？させるかよっ！！」

ビントーの目的を聞いて止めようとする二人だったが、スノーマンがしつこく妨害する。ビントーは大声で笑いながら、他の魔物をひきつけて冰雪の民の集落へと向かっていく。

『ヌウァハッハッハ！じゃあなガキ共！』

「待ちやがれ！くそっ、邪魔な雪ダルマめ……」

「セルキー下がって！一気に決めるわ！」

イリスの言葉に従いセルキーが下がると、イリスは上空に向け矢を放つ。

「ジェノサイドレイン！！」

無数の矢の雨がスノーマン達を襲い、粉々に砕いていく。その跡にはむき出しの地面だけが残っていた。

「早くこの事を皆に知らせなくちゃ！」

「ああ。最短距離で行くからちゃんと付いてきなよ！」

ビントーの野望を阻止するため、イリスとセルキーは集落へと向かって行った。

——冰雪の民の集落。

家の外に出たチョーキーと祖父が、イリス達の帰りを待ちわびていた。

「お姉ちゃんたち遅いなあ～何してるんだろう」

「……ん？なんじゃ、急に空が……」

突如空が暗くなり、激しい吹雪が巻き起こる。突然の吹雪に冰雪の民達が慌てる中、ビントーと魔物達が姿を現す。

「きゃああああ！？」

「なっ、なんだあれは！？」

「お、おじいちゃん……怖いよお」

「心配するなチョーキー。じっとしてなさい……皆の者、武器を持て！」

長老の合図で、氷雪の民達は冷静さを取り戻して一斉に武器を取り出す。その様を見て、ビントーはにやりと笑う。

『又ウァハハ……アイスエッジも作れなくなってるたあ、ずいぶん落ちぶれたなあ氷雪の民共』

「貴様、まさかビントー！？なぜ、ここにいる！？」

『答える必要はないな。ミノちゃん、ウルフちゃん！殺っちまいなあ！！』

ビントーの合図を皮きりに魔物たちが一斉に襲いかかる！最初は応戦していた氷雪の民だったが、魔物達の攻撃に徐々に押され始める……長老は声を張り上げ叫んだ。

「皆の者！海じゃ、海に飛び込め！如何に奴が冬の魔王と呼ばれていようと、深海までは追ってこれぬはずじゃ！」

『又ウァハハハ……小賢しい。お前等あ！一匹たりとも逃すなあ！』

ビントーは楽しげに笑いながら、魔物たちに指示を出す。一斉に襲いかかる魔物達から逃げようと我先に海へ逃げる氷雪の民達。その騒ぎの中、チョーキーは転んでしまう。

「きゃっ！」

「チョーキー。早く立つんじゃ！」

「うっ…くっ……！」

『まずは一匹い！』

「え？きゃあああああっ！」

「チョーキー！！」

チョーキーを驚掴みにするビントー。

「うあう……く、苦しいよお」

「おのれ……チョーキーを離せい！」

『又ウァハハハ……このガキが死ぬのをじっくりと見てるんだなあ！』

「うっ、うわあああん！お姉ちゃん助けてええええっ！」

『ハッハッハッハ、いい悲鳴だあ！』

「やめろ、やめてくれえええっ！」

ビントーが腕に力を込めようとしたその時、ビントーの背後からセルキーが飛びかかり、ビントーの腕めがけて槍を振りおろす。

「この野郎！ チョーキーを離せえええええっ！！！」

『！？』

ビントーの腕を砕いたセルキーはそのままチョーキーを抱えて長老のもとに駆け寄る。一方、ビントーは腕を再び生やすと驚いたように声を上げた。

『ほお、俺っちの雪ちゃん達を倒すとはやるじゃないか。だが、お痛もそこまでよ』

「待ちなさい！ あなたの相手は私よ！」

『？』

セルキーの後を追って現れたイリスは弓を構えてビントーと対峙する。

『デル族の小娘……そんなちっぽけな弓で俺っちを倒せると思ってるのか、笑わせるう！』

「あなたの弱点なんてお見通しよ！ その身体でこの炎を喰らえばどうなるかしら？」

矢に魔力が込められ、巨大な火の鳥が現れる。それを見てビントーは悲鳴をあげた。

『馬鹿、やめろ！ そんな卑怯な……やめろ、やめてくれえい！』

「いいえ！ あなたは絶対に許さない。セルキーの両親、雪女の皆……その命を犠牲にした報いを受けなさい！ 『ゴッドバードフィニッシュ』！！」

巨大な火の鳥と化した矢がビントーに襲いかかる！ ビントーをたちまち激しい炎が包んだ。

『ヌゥァアアアアア！？』

「やった、イリスの勝ちだ！」

「これで終わりね……」

『ぬうぁあんちゃってええ！』

「「！？」」

先ほどまで苦しんでいたビントーの体から突然激しい炎が噴き上がり、炎を纏ってイリスに襲いかかる。

「そんな、馬鹿な……どうなってるの！？」

『ヌゥァハハハ！ アガシユラをなめるなよ小娘え。冬の魔王ってのはブラフ、嘘っぱちのミスリ

ィイド！俺っちは本来【熱のアガシュラ】よ。

絶対零度からセ氏数千度……熱を自在に操るのが俺っちさあ。どうやら俺っちを氷のアガシュラと語り継いでたみたいだが……残念だったなあ？』

「そ、そんな……ありえない……」

『お前達の理解を超えた絶対の存在、それがアガシュラよ！俺っちを熱くさせてくれたお礼だ。たあっぷりと味わいなあ！』

ビントーが雄たけびをあげると、たちまち強烈な熱波がイリスと氷雪の民達に襲いかかった。

「うわあああ！」

「きゃあああっ！！」

一気に静まり返る集落。先ほどの熱波を受け、皆うめき声をあげていた。ビントーは深いため息を吐きながら、チョーキーをかばって傷だらけのセルキーを見つめる。

「くっ……痛う……」

「お姉ちゃん、お姉ちゃん！？しっかりしてえ！」

『はあ…せっかくのコレクションが台無しになっちまったなあ』

「チョーキー！セルキー！おのれえ……よくもワシの孫娘達を…」

ビントーが指をパチンと鳴らすと、セルキー達の周りに魔物達が集まる。

「くっ……」

『もう、お前には興味がない。ミノちゃん、ウルフちゃん、殺っておしまいいっ！』

魔物達が一斉にセルキー達に襲いかかる！イリスは叫び声をあげ、ビントーは高笑いをあげ、セルキーはチョーキーを庇って目を閉じた。

「……？」

暫く経っても何も起きない、不思議に思いセルキーが振り返ると、そこには無数の魔物の攻撃を受けとめながら、今にも事切れそうな祖父の姿があった。

「じ、祖父ちゃん！！」

『馬鹿な、一体あの老いぼれのどこにそんな力が……』

「はあ……はあ……見くびるなよビントー。これでもこの氷雪の民の長。仲間を、家族を守るためならこの程度の痛みなど……ぐっ」

「嫌あっ！おじいちゃん！おじいちゃん！！」

「セルキー、チョーキー……強く生きるのじゃよ！」

『ぬぁあにやってるお前等、さっさとそのおいぼれを……！？』

セルキーの祖父と一緒に、魔物達も氷になっていく。その様を見て、セルキーとチョーキーは叫び声をあげる。

「ただでは死なぬ……こ奴らも道連れじゃ！」

その言葉を最後に、セルキーの祖父は魔物達と共に氷の欠片となって空中に霧散した。唯一、頭にかぶっていたアザラシの毛皮だけがゆっくりと地面に落ち、後には何も残らなかった。

セルキーもチョーキーも、イリスも、他の氷雪の民たちもその光景を見て絶句し、涙を流していた。そんな中、ビントーの笑い声が響く。

『ヌウァハッハッハ！泣かせるねえ、美しい家族愛じゃないか。だが、結局は無駄死にだあ』

「……黙れ……」

『？』

「祖父ちゃんの死を無駄死にだって言った事を取り消せえっ！お前だけは絶対に、絶対に許さねええええっ！！！」

祖父の死を侮辱され、セルキーの魔力が一気に高まる。セルキーは胸の前に両手を出すと、掌に強力な冷気を集め、固めていく。その魔力を感じてビントーは危機感を募らせた。

『こ、この魔力はもしや……お前等あそいつを殺っちまいな！』

「ソウルメイク！『アイスエッジ』！！」

生き残った魔物達が合図を受け、セルキーに襲いかかる！しかし、次の瞬間には氷結し、まるで刃物で切られたかのように、両断され砕けていった。

セルキーの左手に、氷でできた冷たい短剣が現れているのを確認して、ビントーは舌を鳴らす。セルキーはビントーを睨みつけ、その短剣を構えてビントーの前へ躍り出た。

『ハッ！覚醒したのはいいが、そんなちっぽけな短剣で何ができると言うのだ。俺っちに敵うはずがねえだろお！！』

ビントーは炎を纏わせた巨大な剣をセルキーに振りおろした！しかし、セルキーはその小さな短剣でいとも簡単に剣を切り裂き、砕いてしまった。思わずビントーは困惑の声を漏らす。

『馬鹿なあ！？そんなちっぽけな短剣になぜ……』

「わからねえのか？これはアタシの魂からできた剣……手前の安っぽい魂なんかに、負けるはず

がねえだろ！」

ビントーに向かって、短剣を突き立てるセルキー。だが、ビントーは氷の身体に変化して、その攻撃を受けとめた。

「くっ……」

『無駄無駄あ！俺っちは熱のアガシュラだって言っただろ？炎も氷も効かねえよ！』

「それじゃあこれならどう！？」

『！？』

セルキーと反対方向から、イリスが火の鳥を放つ！すると、ビントーは身体の半分を炎に変換し、攻撃を受けとめた。

イリスとセルキーはビントーから一端距離を開け、息を整える。

『又ウァハッハッハ！無駄無駄無駄あ！俺っちこう見えて器用なんよ』

「くそっ。一体どうすれば……」

「セルキー、私に力を貸して！」

「力を貸すって…ど、どうやって？」

「私の『ゴッドバードフィニッシュ』と、あなたのありったけの冷気魔法を同時にぶつけるの！」

「む、無茶だ！だいたい、そんなの無理……」

「私を信じて！私たちならやれる！」

「……分かった。イリスを信じるよ」

『フン！ぬぁあにかと思えば下らない……付け焼刃で相反する魔力を融合なんてできるはずがないだろお！』

ビントーが炎と吹雪を身体から巻き起こし、イリス達に放った！だが、二人の強力な魔力に無効化され、逆に二人から放出される魔力に、ビントーは思わず狼狽する。

『又ァアッ！？ば、馬鹿な……ありえん。俺っち以外で冷気と灼熱を同時に操るなど……ま、まさか。これがデル族の力だと言うのかあ！？』

「「はぁぁぁぁあっ……」」

『認めん！俺っちは絶対に認めんぞ！喰らえい！これが本物の融合魔法だ！』

ビントーは炎と吹雪を掌に集めると、二人にめがけて一気に解き放った！一方のイリスとセルキーも、互いの魔力を融合させ、同じように魔力を解き放つ。

「ゴッドバードフィニッシュ！」

「セスティナ！」

イリスとセルキーの魔力が融合しあい、青い炎を放つ不死鳥がビントーの放った魔力を吸収して巨大化し、そのままビントーへ襲いかかる！

『ばっ、馬鹿な！馬鹿ぬうあああああっ！？』

ビントーの身体に燃え移った炎はたちまちビントーの身体を融かし始める。ビントーは絶叫しながら炎を振り払おうと身をよじらせる。

『熱い！寒い！焼ける！凍る！苦しい、苦しいいいっ！死ぬっ！？お、俺っちこのまま死んじゃう！？馬鹿な、不死身のアガシュラが死ぬっ！？

そ、そんなことぐあああああああああああっ！！』

断末魔の悲鳴をあげながら、ビントーは空気に溶けるように消滅した。ビントーが消滅したのを見て、氷雪の民達から歓声がわきあがった！

「はあ……はあ……祖父ちゃん、父さん、母さん……仇は取ったよ」

「やったね……セルキー！」

疲れがどっと出たのか、イリスとセルキーはその場に座り込みながらも、互いに笑顔を見せハイタッチを決めた。

——数時間後。集落に面した海岸から、セルキーは祖父、父、母の毛皮を海に沈めていた。チョーキーは今にも泣きそうな顔をしながら、花を投げ込み、イリスは手を合わせて追悼する。遠巻きに他の氷雪の民たちもすすり泣いていた。

「祖父ちゃん、父さん、母さん……」

「ひっく、ひっく……」

「どうか皆さん安らかに……」

イリスの横顔を見ながら、セルキーは少し悲しげに声を出す。

「イリス……悪いんだけど、アタシやっぱイリスと一緒にいけないや」

「え？お姉ちゃんどうして？チョ、チョーキーなら一人でも平気だよ？だ、だから……」

「……お前を置いていけるもんか」

「うっ、うっ……うわあああん！お姉ちゃあああん！」

セルキーにしがみつくと、イリスは笑みを浮かべる。

「そうだよね、離れ離れは寂しいもんね……分かった。それじゃあ、私はこのまま……」

「あっ！ちょっと待ちなよイリス！」

「？」

「……これを」

セルキーはビントーとの戦いで使用していたアイスエッジを取り出すと、イリスに手渡す。

「これはあの時の……どうして！？」

「それはあたしの魂がこもった刃だ。たとえ離れ離れだとしても……アタシの魂はそこにある。だから、お守り代わりに持ってきてくれよ！その方がアタシは嬉しい」

「……分かった。大事に、大事にするね。そして、アガシュラとの戦いが終わったら必ず返しに来るわ！約束よ！」

「へへっ……そんな時は盛大に歓迎してやるよ！」

「近くに来たら寄ってくれ、アンタなら大歓迎だ」

「ちょっとお、昨日までビビってたのに調子いいわねえ」

「なっ、そう言うお前だって……」

「ぷっ、あははははっ！お前等本当調子がいいんだから……」

「セルキーまで……ひどいぜ」

「えへへ、みんなイリスお姉ちゃんの事だいすきになってくれてうれしいなっ♪」

その時、イリスを呼ぶ声が木霊す。

「おーい、イリス～！」

「どこで道草食ってんのよお～！」

「あっ！ムーウエン！それにジョエも！」

「……あれがイリスの仲間か」

「うん。私の大事な仲間だよ！」

「そうか……じゃあなイリス。またいつかここで！」

「うん！皆さようなら～っ！」

——氷雪の民たちの歓声を受けながら、イリスは再び冒険の旅へ出る。その懐に、新しい仲間の魂を携えて。